

認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

東日本大震災 被災者支援 2016 年度 活動報告書



きずなづくりの一翼として～御礼と引き続きのご協力を



レスキューストックヤード代表理事 栗田 暢之

震災から6年を経た七ヶ浜町では、2016年2月、宮城県では初となる海の駅「松島湾海鮮市場 七のや」が花浜にオープンし、また、8月には10日間の期間限定ではありましたが菖蒲田浜海水浴場の海開きもありました。いずれも多くの方々が待ち望んだものであり、復興が実感できる「にぎわい」の場となりました。一方、421戸が建設された応急仮設住宅はすべて閉鎖し、2017年3月30日には、町主催による閉所式が開催されました。当方スタッフも感慨深い思いで参列させていただきました。

このように、着実に復興が進みつつある中、当法人としても引き続き「きずなハウス」を運営し、連日多くの子どもたちが訪れる、もはや日課のような場として、子どもたちから認められています。「きずな号で宿題を済ませてから」というルールも併せてです。また、復興庁・心の復興事業による「きずな食堂」と題した企画では、各地区に建設された災害公営住宅の集会所等で楽しい食事会などを開催し、特に高齢者の憩

いの場として、住民同士のコミュニティ再構築の一助になっています。一方で若者や母親世代の住民、同世代のスタッフが一緒に企画の段階から練り上げた「はまのわ Book Cafe」や「はまのわグラム展」は、その斬新さはもとより、SNSでの発信でさらに同世代の参加者を呼び込むなど、さらなる可能性につながっています。後は「父ちゃんたちをどうするか」…など、世代や地域、セクター、町内外を超えた交流の促進、そしてあの時の悲しみを何とか明日への希望へとつなげられるよう、「復興まちづくり」という大きなテーマの「人のきずなづくり」という小さな実践を、当法人としては丁寧に紡いで参りたいと考えています。

2016年度も本当に多くの皆様のご支援とご協力に支えられました。心より厚く御礼申し上げます。2017年度はいよいよ新しい「きずなハウス」もオープンいたします。「We Love 七ヶ浜」の拠点として、大いに活用して参る所存です。皆様のお越しをお待ちしております。

「心の声」反映し、新たな活力につながる場を



レスキューストックヤード常務理事 浦野 愛

3月11日、私は町の追悼式に出席するために、震災から丸6年を迎えた七ヶ浜を訪れました。以前、仮設住宅が立ち並んでいた第一スポーツ広場や七中グラウンドは更地になり、新しい堤防や高台に新築された家々、災害公営住宅などは復興の象徴のように見えました。しかし、ある住民の方から「自分の思い描いていた復興のイメージと現実の暮らしとの間に違和感があって気持ちがモヤモヤする」という言葉を聞きました。話を進めるうちに、違和感とは、震災で失ったものへの喪失感、自分や家族の加齢、健康状態の悪化、これに伴う先々の生活や経済的不安などを指しているように感じました。心のどこかにある「こんなはずじゃなかった」という思いや「これからどのくらい頑張れるだろうか」という漠然とした不安の気持ちが表れた一言だったの

かも知れません。見た目では捉えきれない複雑な思いに目を向けられる人や、安心して心の内を吐き出し、様々な人たちとの関わりの中で新たな活力を見出せる場の必要性を実感しています。

私たちは、きずなハウスやきずな食堂などを通じて、「居場所・交流・役割の場づくり」に取り組んできました。この場は、いつも住民の皆さんの存在が中心にありました。地区の方々が復活させたいもの、残したいもの、新たに創っていききたいことを相談し、一つずつ実現していく姿を見て、長い歴史の中で培われてきた七ヶ浜の生きる力の本質を学ばされています。これから仮設店舗跡地に立つ「みんなの家・きずなハウス」が、皆さんの活力源の一つになれるなら、これほど嬉しいことはありません。

七ヶ浜町の概要と震災による被害

七ヶ浜町は仙台市から15kmほど北東に位置する半島状の町。人口は約2万人、面積約13.3k㎡。

名前の通り「7つの浜」に囲まれ、漁業や観光が盛ん。「菖蒲田浜」は東北で最も古い海水浴場といわれ、家族連れをはじめサーフィンのメッカとして若者にも親しまれています。

昔ながらの漁師町のほか、仙台のベッドタウンとして新興住宅地も開発され、新旧の住民が入り交じった土地柄に。

スポーツ施設やホールが充実しており、外国人の避暑地だった歴史から造られた「国際村」では、地元の子どもたちを中心としたミュージカル劇団がつくられています。



2011年3月11日、東日本大震災で震度5強の地震後、最大12.1mの津波が襲来。

菖蒲田地区を中心に沿岸の集落に被害

津波浸水面積4.8k㎡（町面積の36.4%）

死者108名、行方不明者2名

全壊674世帯、大規模半壊236世帯、半壊413世帯、一部損壊2,600世帯の家屋被害

町内36カ所の避難所にピーク時で6,143人の町民が避難

七ヶ浜町の復興状況

2017年3月末、町内6カ所373戸の応急仮設住宅が閉所となりました。仮設住宅やみなし仮設住宅などに住んでいた方々は、高台住宅団地や災害公営住宅に引っ越しを済ませ、新たな生活をスタートさせました。しかし、コミュニティーの形成などの課題も出てきています。以下は高台住宅団地や災害公営住宅の整備戸数と入居状況です。

【高台住宅団地（防災集団移転促進事業）】5箇所194戸整備完了

整備・再建状況[5/1 現在]

- 1 松ヶ浜西原地区：整備戸数 13
- 2 菖蒲田浜中田地区：整備戸数 30
- 3 笹山地区：整備戸数 128
- 4 吉田浜台地区：整備戸数 9
- 5 代ヶ崎浜立花地区：整備戸数 14

整備戸数計 194（着工 183・再建 183）

※再建戸数は、住宅完成後、高台住宅団地に住所を移した戸数

【災害公営住宅（災害公営住宅整備事業）】5箇所212戸整備完了

整備・入居状況[5/1 現在]

- 1 松ヶ浜地区：整備戸数 32（入居 28）
- 2 菖蒲田浜地区：整備戸数 100（入居 95）
- 3 花淵浜地区：整備戸数 50（入居 44）
- 4 吉田浜地区：整備戸数 6（入居 6）
- 5 代ヶ崎浜地区：整備戸数 24（入居 22）

整備戸数計 212（入居 世帯 195）

七ヶ浜事務局 2016 年度の活動

- 2016 年**
- 4/1 ユニー・ハーゲンダッツ楽器贈呈式
 - 5/3~5 インターナショナルデイズ アメリカ(国際村) にポーちゃん焼き出店
 - 6/19 親子すまいるフェスタへ協力
 - 6/26 第1回「はまのわ Book Cafe」開催
 - 7/17 「塩竈みなとまつり」にポーちゃん焼き出店
 - 7/28 第6回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう①」開催
 - 7/29 第6回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう②」開催
 - 7/31 第2回「はまのわ Book Cafe」開催
 - 8/2 第6回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう③」開催
 - 8/3~5 常総市七ヶ浜町交流ツアー
 - 8/4 第6回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう④」開催
 - 8/7~8 きずな号企画・朝日町キャンプの実施
 - 8/21 第3回「はまのわ Book Cafe」開催
 - 8/28 諏訪神社例大祭にポーちゃん焼き出店
 - 9/17 第7回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう～海釣り～」開催
 - 9/25 第1回「きずな食堂 in 松ヶ浜」開催
 - 10/1 第4回「はまのわ Book Cafe」開催
「地域連携復興市 ゆめ博@塩竈市」にポーちゃん焼きを出店
 - 10/15 第8回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう～海釣り～」開催
 - 10/16 「あさひ園祭り」への協力
 - 10/23 第2回「きずな食堂 in 吉田浜」開催
 - 10/30 第3回「きずな食堂 in 菖蒲田浜」開催
 - 11/8 「仙台鍋まつり」にポーちゃん焼き出店
 - 11/12 「菖蒲田浜ポッケ汁祭り」へ協力
 - 11/16~18 七ヶ浜町立向洋中学校2年生職場体験受け入れ
 - 11/18 七ヶ浜町立向洋中学校地域学習訪問受け入れ
 - 11/20 第4回「きずな食堂 in 代ヶ崎」開催
第5回「はまのわ Book Cafe」開催
 - 12/3 第5回「きずな食堂 in 松ヶ浜」開催
 - 12/4 第6回「きずな食堂 in 花淵浜」開催
 - 12/11 「ホルン紅白歌合戦(音楽の力による復興センター)」へ協力
 - 12/23 「子どもサンタが家にやってくる2016」実施
 - 12/25 「七の市」にポーちゃん焼き出店
- 2017 年**
- 1/9 「新春! 餅つき大会」開催
 - 1/22 「あそぶさございん七ヶ浜 de お正月」へ協力
 - 1/28 第7回「きずな食堂 in 笹山」開催
 - 1/29 「七の市」にポーちゃん焼き出店
 - 2/1 みんなの家 きずなハウス地鎮祭実施

- 2/12 「復活！中島ラーメン」開催
- 2/18 「七ヶ浜を語り継ぐ交流会」開催
- 2/19 「笹山地区子ども会発足交流会」開催
- 2/26 第8回「きずな食堂 in 菖蒲田浜」開催
- 3/4～5 「はまのわグラム展」開催
- 3/11 七ヶ浜町慰霊祭へ参加
- 3/12 「3.11 メモリアルイベント」へ協力
- 3/19 第9回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう～海苔すき体験～」開催
みんなの家 きずなハウスワークショップ開催

七ヶ浜事務局 定期開催の活動

- 復興支援調整実務者会議への参加・隔月1回
- きずな号（学習スペース）の開放（閉所日以外毎日）
- きずな喫茶 in 松ヶ浜への参加
- 社協各地区お茶会（毎週水曜日）への参加



名古屋事務局 2016 年度の活動

- 2016 年**
 - 4/29 R S Y 大口町倉庫、うるうるパック化作業
 - 5/8 F O R 子ども支援～広域避難の子ども達の夢の実現を！・贈呈式
 - 6/10・16 みちのく屋「東北屋台村みちのく食堂」でF O R 子ども基金の募金活動
 - 9/20 R S Y 大口町倉庫、うるうるパック化作業
 - 9/25 ふくしまくらしの相談会（岐阜市）
 - 10/10 R S Y 大口町倉庫、うるうるパック化作業
 - 10/23 R S Y 大口町倉庫、うるうるパック化作業
ふくしまくらしの相談会（四日市市）
 - 12/3～4 福島復興体感ツアー、帰還者交流会（いわき市）
- 2017 年**
 - 3/5 「知多半島国際音楽祭 2017 復興への祈りと鎮魂」で、七ヶ浜のパネル展示とDVD
上映・朗読、募金活動
 - 3/11 東日本大震災犠牲者追悼式あいち・なごや運営（実行委員長として）
 - 3/18 東日本大震災被災者語り継ぎの集い運営（実行委員として）

災害公営住宅及び防災集団移転

七ヶ浜町では、5地区に212戸の災害公営住宅と194戸の高台住宅団地を建設しました。2015年に完成し、現在は入居もほぼ完了しています。

移住先は町の施策により、なるべく震災前に住んでいた地区に戻れるよう配慮されています。とはいえ、再び住環境が変わり、新たな人間関係を作らなければなりません。特に高齢者世帯や単身の男性など、新しい生活に慣れるまで時間のかかる方に対しては、引きこもりや生活不活発病の悪化、孤独死が心配されました。

そこで移転後も、レスキューストックヤード(以下、RSY)スタッフは、気になる方へ戸別訪問を継続し、

体調不良者や困りごと、不安の声をなるべく早く見つけ、町や社協ともその情報を共有してきました。また、コミュニティづくりに向けた住民からの提案に対しては、実現に向けて一緒に取り組みながら、やる気を応援しています。



きずな喫茶 in 松ヶ浜

2016年4月から、松ヶ浜地区の災害公営住宅で週1回「きずな喫茶」を開催しています。この地区はさまざまな地区から移住者が集っていることもあり、早い時期に住民から、「早くご近所と仲良くなるためにみんなが集える場をつくりたい」という声が上がっていました。そこでRSYが「きずな喫茶」を開催し、当初は参加者への声かけや運営役を担っていました。

しかし、最近は住民同士でお互いに漬物や茶菓子を持ち寄ったり、住宅内の公園の花壇の世話を始めたりするなど、次第に新しいアイデアの提案や役割分担も出てきています。

回数を重ねるうちに、災害公営住宅周辺の地域の方々も参加するようになり、コミュニケーションの輪は確実に広がりつつあります。



心の復興事業

復興庁被災者支援総合事業「心の復興事業」からの補助金で、災害公営住宅と周辺地域との多世代交流やコミュニティづくりの促進を目的に、「きずなハウス（p8 参照）を活用した支え合いの場づくり」に取り組みました。

主に、食を通じて災害公営住宅での引きこもり防止や人のつながり、役割づくりを目指した「きずな食堂」（全8回開催、501名参加）と、地区全体の復興への機運を高める「交流企画」（全4回開催、983名参加）を実施しました。いずれのプログラムも、地区の有志が集まって実行委員会をつくり、企画立案や当日の運営などを主体的に進め、RSYはサポート役に徹しました。

「きずな食堂」では、芋煮や炊き込みご飯、餃子、

すいとん、カレーなど、バラエティーに富んだメニューが提案されました。調理や配膳には、子どもたちからお年寄までがかかわり、みんなで役割分担できたことも、楽しさややりがいを後押ししました。

「交流企画」では、災害直後に地元漁師が町の再建を願って始めた「ぼっけ汁祭り」や、被災したラーメン店の1日限りの開店企画、クリスマス会や餅つき大会などを実施しました。こちらも町民らが中心になって企画、運営しました。

事業を通じて、「地域のためにできることをしたい」と願い、行動する方々が数多くいることが分かりました。RSYは地域の大切な資源である人、アイデア、ネットワークを町民が最大限に発揮できるよう、今後もサポートしていきます。



きずなハウス

きずなハウスは、2014年12月に仮設店舗「七の市商店街」にオープン後、2015年12月から七ヶ浜町老人福祉センター内に移転しました。R S Y事務所兼地域のコミュニティスペースとして、子どもからお年寄りまで毎月1,300名が利用しています。

施設内には200種類以上の駄菓子コーナーや、町内各種のお知らせやイベント情報を張り出す情報掲示板を設置し、町の観光キャラクターを模した名物「ぼっけのポーちゃん焼き」は広い世代から愛され続けています。

午前中は年配者やお年寄り、午後からは赤ちゃん連れのご家族や小中学生で賑わいます。「ここに来ると

故郷に帰ってきたみたい」という子どもたちの言葉に、町民にとって安心できる居場所の一つになりつつあることを実感しています。



みんなの家 きずなハウス (2017年7月オープン予定)

きずなハウスが、仮設店舗跡地に再び「みんなの家きずなハウス」としてリニューアルオープンすることになりました。建設にはR S Yの活動に賛同いただいた株式会社ロレックス、株式会社サークルKサンクス、NPO法人HOME-FOR-ALLからの多大なる支援がありました。

従来の機能に加え、屋内外に約60人分の座席を確保、新たにピザ釜も用意する予定です。事前にきずな

ハウスをよく利用してくれている小中学生や高校生、地元の若者、子育て・中高年世代でワークショップを開き、どのような場所にしたいかアイデアを募りました。

「ポーちゃん焼きの新味を出してほしい」「子連れでもランチが食べられるといい」などたくさんの意見が出て、今から期待が膨らんでいます。施設は町に寄贈され、運営は引き続きR S Yが担います。



きずな号

「きずな号」は、狭い仮設住宅の生活の中でも子どもたちが気兼ねなく友達と語り、勉強に専念できるよう、サークルKサンクスからの寄付を得て2015年度から運行しています。ここでは、子ども向けの本や自主学習用の机・椅子が備え付けられており、熱心に宿題に取り組む子どもの姿が見られます。

他にも、地元漁師の協力のもと、釣り体験や海苔すき体験ができる「きずな号で七ヶ浜を学ぼう」企画も

開催しています。震災後に遠のいてしまった海との距離を縮め、子どもたちが再び海と触れ合えるきっかけになればという願いから始まりました。

2016年度は、漁業組合や歴史資料館、町民の方々から話を聞いて七ヶ浜を知る「調べ学習」の機会も提供。それをもとに2015年に洪水被害を受けた茨城県常総市の子どもたちとの交流バスツアー（p12参照）で七ヶ浜の紹介をしました。



企業からの支援

4月1日にユニー株式会社とハーゲンダッツ株式会社のドネーション企画として、RSYを通じて七ヶ浜町の和光幼稚園（写真左下）と、同じ宮城県内の山元町南保育所（写真右下）に楽器が寄贈されました。

南保育所は津波の直接的な被害は受けず、町営であるため外部の支援があまり入っていなかったため今回、話がつながりました。寄贈式では、子どもたちが感謝の気持ちを込めて、楽器を演奏してくれました。

2017年度から北保育所と統合して「つばめの杜保育所」として新たなスタートを切り、ピカピカの園舎で楽器が使われています。

ユニーと花王株式会社のドネーション企画では、きずなハウスに絵本が寄贈されました。震災から7年目となる中、企業からの息の長い支援は、被災者のみならず、現地で活動する支援者にも心強い存在であると感じられます。



地域イベント・地元ボランティアグループの活動サポート

R S Yは町内外で開催されるイベントで町民からよく声をかけてもらい、ブース出展や子ども向けワークショップなどに参加しています。特に「ポーちゃん焼き」は大人気で、1年中、各地の祭りやイベントなどで引っ張りだこです。

また、ワークショップの運営には、東北学院大学や地元の向洋中学校のFプロジェクト(震災学習を経て復興の町づくりのために活動する中学生ボランティアグループ)の生徒も積極的にかかわってくれています。



2015年度から、地元の若者やママさん世代が中心となり、ボランティアグループ「はまのわ」が立ち上

がりました。「震災をきっかけに七ヶ浜に暮らす私たちが、大好きな七ヶ浜のことを知り、伝えられるようになりたい」という想いに賛同し、R S Yも運営のお手伝いをしています。

2015年秋には、「私の好きな七ヶ浜の風景」をテーマに、「しちがはま展覧会はまのわ」を開催しました。展覧会の写真や思い出のエピソードは、すべて町民から募りました。また、七ヶ浜の美しい風景を描き続けていた画家、古山拓さんの絵画も展示し、思い出をひもとくと共に、人や風景など、町が持つ本来の魅力を再発見、再認識する機会にもなりました。

これを機に、第2弾として2016年6月から「はまのわ Book Cafe」をスタートさせ、月1回のペースで開催しています。日本三景の一つである松島を一望できる観光名所「多聞山」を会場に、本棚には文庫本や雑誌、絵本を並べ、コーヒーをいれて訪れた人にのんびり過ごしてもらっています。回数を重ねるごとに来場者も増えました。

ボランティアグループのメンバーも増え、16年3月には七ヶ浜町国際村で「はまのわグラム展」を開催。「はまのわ」の活動で繋がった方々が、七ヶ浜の魅力を伝える写真約250点を提供し、写真展を開催することができました。現在は写真集を作成中です。



3・11 メモリアル

2017年3月12日、7年目のメモリアルイベント「うみつなぐ～歩もう未来へ」を開催しました。町内外から約30名が参加し、午前中は老人福祉センター浜風で昨年つくった紙芝居「あの日の僕 七ヶ浜の3・11」を上映。午後は菖蒲田浜に完成したばかりの防波堤の上を参加者と共に歩きました。

地元のボランティア団体が中心となり、運営委員会を結成。RSYも構成団体の一つとして参加しました。「あのとき海は怖かったけれど、この日の海は青く、飛び交うかもめたちに心癒やされるメモリアルイベントとなりました。年々、参加人数は少なくなって

いますが、来年も再来年もずっと続けていきたい」との声が聞かれました。



被災地間交流（茨城県常総市）

8月3日～5日に茨城NPOセンター・コモンズの協力を受け、「常総市・七ヶ浜町交流バスツアー」を



企画し、常総市の子どもたちを含めた16名を七ヶ浜町に招きました。

茨城県常総市は2015年9月に発生した「関東・東北豪雨水害」で甚大な被害を受け、被災から1年近くたっても子どもたちの心の傷が癒えない状況を見て、このツアーを企画しました。夕涼み交流会を行い、七ヶ浜の子どもたちが常総の子どもたちに町の魅力を紹介してくれました。町民約40名の協力ですりめんやビンゴ大会などの交流、プレオープンした菖蒲田浜海水浴場で遊ぶこともできました。

被災地間交流（熊本県御船町）

12月2日、RSYが事務局を兼務する「震災がつなぐ全国ネットワーク」の事業の一環として、熊本県御船町で「復興寺子屋」を開催しました。

御船町は熊本地震で震度6強の揺れにあい、21カ所に425世帯の仮設住宅が建設されました。そこで、七ヶ浜町第一スポーツ広場仮設住宅代表世話人だった星仁さんをゲストに迎え、見守りや自治会活動をはじめとしたコミュニティづくりのさまざまな事例を、御船町の仮設代表者や生活支援員に話していただきました。

「できることを一つずつ地道に続けていけばいい」「住民を一人ぼっちにさせないように」という星さん

の優しくも力強いメッセージに、多くの人たちがやる気と安堵の表情を見せていました。

寒さが厳しくなるころには、七ヶ浜町吉田浜地区の方々が、御船町に300枚を超える手編みのセーターやベストを送ってくれました。



東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）への参画

JCNは今年度も栗田が代表世話人の立場を継続しました。

被災3県の常駐スタッフが巡回訪問した団体数は642団体（岩手251、宮城141、福島200）、月平均約50団体。会議参加は280回、月平均23回以上となり、JCN設立以来心がけてきた「各地の支援団体との丁寧な関係構築」を継続してきました。また、広域避難者支援については、全国ミーティング1回、ブロックでのミーティングを9回開催し、当事者を含む支援団体などが「今」抱える複雑な気持ちや不安、悩みに向き合いました。

岩手県ではもともと抱える少子高齢化などの社会

課題と復興をどう両立させるか、宮城県では仮設住宅がなお残る地域での見守りや恒久住宅への移転後のコミュニティ再構築の課題、福島県は原発事故による影響が県内外で色濃く残る現実の中、広域避難者の諸課題を含むさまざまな「分断」をどう紡いでいくかという難題があります。

こうした中、新しい「きずなハウス」周辺の緑化に仙台泉の支援者をつないでもらったり、愛知県から福島県に帰還した方の支援のために福島県内のNPOを紹介されたりするなどして、RSYとJCNとの連携で、さらに支援の輪が深まるなどの効果が続いています。

「うるうるパック」の配布

災害ボランティア活動支援プロジェクト会議(支援P)の助成を受けて、昨年度に続き「うるうるパック」を届けました。

復興公営住宅に転居した方々を対象に、一人ひとりの暮らしの状況についてお聞きするコミュニケーションツールや、被災地域全体の新しいコミュニティの醸成に役立ててもらうことが目的です。RSY大口町倉庫を拠点とし、延べ96名がパック化作業に参加。4市町（岩手県釜石市、宮城県石巻市、七ヶ浜町、亘理町）に2,825パックを届けました。

釜石市からは「今でも忘れずに想っていてくれてう

れしい」「仮設住宅から引っ越したら、もう誰も来ないと思っていたのでとてもうれしかった」との声が届いています。



東海地域の避難者支援ネットワーク

震災から6年が経過し、避難者が抱える課題はますます個別化、深刻化していく一方、各地域での支援団体は限られています。一団体での対応が難しく、避難先地域によって受けられる支援に差も生じているこ



とから、タケダ・赤い羽根広域避難者支援プログラム助成金を受け、東海4県の支援関係者同士が集まり、各地域の状況を共有しつつ課題解決に向けて意見交換する場を設けました。

避難当事者の「忘れないで」という声から、その状況を広く一般に知ってもらうための冊子も作成。住宅無償提供の打ち切り、健康不安、子どもの声など、避難者が抱える課題を4コマ漫画で分かりやすく紹介し、理解と支援の輪を広げる活動に活用されています。

愛知県被災者支援センター

愛知県には2016年3月現在、約400世帯1,000名が県外避難しています。愛知県は、県内のNPO法人に委託する形で、11年6月にセンターを設置、16年度はRSYを含めた3団体が運営を務めました。

福島県の避難指示区域外からの避難者（自主避難者）の応急仮設住宅の供与期間終了に伴い、約100世帯が住居の決断を迫られました。相談交流会を県内各地で7回実施し、被災県の行政担当者や県内の住宅関係者、医師、弁護士、キャリアコンサルタントなどの専門家に住宅や暮らしの課題について相談できる機会を設けました。

市町村や保健師などと連携した個別訪問や電話聞き取りも継続実施しており、これからも一人ひとりの状況を丁寧に把握し、その人に寄り添った支援を検討、実施していきます。



RSYふくしま支援室

福島県から東海3県（主は岐阜・三重）に避難されている方への支援を目的に、2016年度からRSY内に「ふくしま支援室」が開設されました。

主な活動は①個別相談窓口の開設、②説明会・交流



会の開催、③地域支援団体との連携・協力、④戸別訪問の実施、⑤福島復興体感ツアーの開催。

相談ダイヤルには5件の相談があり、うち2件は緊急性が求められる内容でした。

説明会は岐阜市と四日市市で開催。戸別訪問は岐阜、三重の8軒に伺い、避難者一人ひとりの要望や生活状況を尋ねて、孤立化防止と寄り添った支援を目指しました。福島ツアーには16世帯35名が参加。ふるさとの現状を確認し、今後の生活を考える機会としてもらいました。

東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごや

名古屋市社会福祉協議会が主体となり、RSYや各区の災害ボランティアネットワークで構成する「なごや防災ボラネット」が協力して運営。市内に避難されている方の支援にあたっています。

6年が過ぎると住宅補助が切られ、帰還するか、終の棲家をどこにするかなど究極の選択を迫られる方も多く、今まで以上の相談件数がありました。一人暮らしや高齢者の生活支援、福祉関係機関の相談も多くなっています。

「お茶っこサロン」は2016年度に5回開催し、「こんなに長くお茶っこ開いてくださって本当に感謝」「いろんなことを知れて楽しかった」といった声が寄

せられました。（写真は7月のアサヒビール名古屋工場見学时）

設立時からのモットー「寄り添い、ゆっくりと、でも全力で応援します」を大切に、今後も引き続きニーズに合わせた支援を展開していきます。





七ヶ浜町長 寺澤 薫

R S Yの皆様には、震災直後から多くの心温まるご支援をいただき、厚く御礼申し上げます。おかげさまで七ヶ浜町では、今年3月末をもって全ての仮設住宅が閉所となりました。復興へは未だ道半ばですが、これからは人と人をつなぐコミュニティーの構築、賑わいの創出といった「心の復興」にも力を注いでまいります。建設中の「きずなハウス」も、人と

人をつなぎ、町に賑わいを創り出す拠点になると大きな期待を寄せているところです。

皆様方のご活動は、優しく背中を押してくれるような温かさがあります。これまでのご支援に対し改めて感謝を申し上げますとともに、今後も笑顔あふれるまちづくりにお力添えをいただきますようお願い申し上げます。



七ヶ浜町社会福祉協議会会長 阿部 和夫

R S Yの皆さまには、6年間の長きに亘り七ヶ浜町で多くの支援活動をして頂いております事、衷心より感謝を申し上げます。お陰様で七ヶ浜町は、災害公営住宅入居や高台移転もほぼ完了しております。これも外部支援の皆様のお力添えがあったからです。しかしながら、被災された方々の心の復興にはもう少し時間が必要と思います。

現在、R S Yと社会福祉協議会が取り組んでいます「被災地区サロン活動」においては、僅かな時間ですが地域の皆さん方の交流が深められ、談笑することで気分転換が図られています。

温かなご支援を頂きました皆さまに改めて感謝を申し上げ、R S Yの皆さまの益々のご清栄をご祈念いたします。



七ヶ浜町民（防災集団移転） 渡邊 佐知子

高台移転先として新たにできた笹山地区に子供会が設立されました。子供会活動として、1回目の行事を企画中にR S Yの方から「きずな食堂」という世代間交流事業の提案を受け、子供会設立記念行事として「お好み焼きパーティー」を企画しました。スタッフの方には企画から材料の調達、地域の方へ

の声かけ等たくさん協力していただきました。反省すべきところはたくさんありますが、子供会のお母さんたち、地域の方と子供たちの交流の場になったと思います。このような事業で交流を深めて地域全体で子供たちの成長を見守っていただけたらと思います。



七ヶ浜町民（災害公営住宅） 目黒 晴美

私は松ヶ浜地区の町営住宅に息子2人と私の3人で住んで2年が過ぎました。本当に月日が経つのは早いものです。

松ヶ浜はいろいろな地区から集まった人が入居しています。高齢者、介護を受けている人、見守る人、一人暮らしの人、小さいお子さん連れの家族。たくさんの方がいるからこそ、お茶会をしようと松永さん、郷古さんに相談しました。平成28年4月から週に1

回、きずな号で来てもらい、始まった「きずな喫茶 in 松ヶ浜」。きずな号でのお茶会は笑顔がたくさんあり、とにかく楽しかったです。今ではきずな号に乗り切れないほどになったので地区避難所で開催しています。

これからも松ヶ浜地区の子どもから大人までどなたでも参加できるお茶会、交流会を続けていきたいと思っています。



向洋中学校教諭Fプロ担当 瀬成田 実

R S Yのみなさんとの出会いは、2015年秋に「聞き取り調査」で松永さんにお世話になったときでした。R S Yが震災以降、七ヶ浜の復旧と復興のために献身的に活動してきたことを知り、しかもその中心が若者たちであったことに深く感銘を覚えたものです。

その後、震災学習を重ねた子供たちは、「七ヶ浜の

復興のために」とFプロジェクトを立ち上げ、現在に至っています。活動を通して、子供たちは七ヶ浜をどんどん好きになっています。郷古さんや槇島さんが地元の方と子供たちを繋いでくださったおかげです。若いお二人には本校の生徒にとって貴重な「人生のモデル」です。感謝に絶えません。これからもよろしくお願いたします。



きずなハウス利用者 菊田 麻公子

あの震災の時、長男は10カ月。不安な日々の中、R S Y

の方々には親子共々楽しい場をたくさん作っていただき、今でも懐かしく思い出されます。あれから6年。今では弟と妹ができた長男。週1回、きずなハウスに行くことをとても楽しみにしています。毎回100円ずつ。子ども達が自由にお買い物を楽しみます。その姿が微笑ましくも思えるし、スタッフの方とおしゃ

べりするなど、一緒に行く親の私もホッと一息つける大切な場所です。

きずなハウスのスタッフの皆さん、いつも子ども達の気まぐれな買い物に優しく接していただきありがとうございます。そして子どもの成長と一緒に見守っていただきありがとうございます。子ども達も私もスタッフの方々が大好き、きずなハウス大好きです。これからも親子共々よろしくお願いたします。



きずな号利用者 佐々木 明日香

うちの息子達は、もう数え切れないくらいお世話になっています。

釣りや海苔すき体験、子供サンタ、常総市との交流で海に連れて行ってもらったり、朝日町へ合宿に行ったり。

ときどき勉強するのもにも利用させて頂いているようです。

いつでも笑顔で親切に接して下さるスタッフの方々と、楽しみながらいろいろ学び、少しですがボランティア活動にも参加させて頂きました。

普段、なかなか出来ない事を体験させて頂き、子供達は身も心も成長したように感じています。

これからも、たくさんお世話になると思いますが、親子共々よろしくお願いたします。



はまのわ 鈴木 しおり

たくさんのご協力をいただきながら、「はまのわ Book Cafe」や「はまのわグラム展」の開催など活動を続けてきたことで、興味を持ってくれる人が増えたと実感できたことが良かったです。色々な方と繋がりができて、町内に住んでいても知らないこと、知らない場所がまだまだあるんだということも分

かりました。

はまのわでは「七ヶ浜のくらしを楽しく」という活動のテーマを掲げています。まずは何よりも自分たちが楽しみながら活動することを大切にして、「こんなことをやってみたいな」という思い付きやアイデアを出し合って形にしていけたらいいと思います！



星のり店 星 博

「失敗!」「うーん、うまくいかないなあ〜」などと言いながら何度もノリ簾に生海苔を流し込む真剣な顔、顔。

R S Yの皆さんの企画で七ヶ浜の子どもたちと手漉きのり体験教室を開催することが出来ました。

道具もない昔の海苔づくりがいかに大変であったか、海苔一枚が出来上がるまでの作業などを知ってもらえたことは生産者としてとても嬉しいことです。

七ヶ浜は小さな町なのに住んでいる人たちのつながりが薄いと日ごろ感じております。

海苔体験だけではなく、農業、漁業等いろいろな分野の人たちと住む人たちが手を携えて、つながりあえば更なる七ヶ浜の発展になると思います。

R S Yの皆さんが一人一人を繋いで後押ししてくださっていることに感謝申し上げます。

「私だけのオリジナル海苔作り」みんな来てね〜。



向洋中学校Fプロジェクトリーダー 阿部 花映

私たち向洋中Fプロジェクトは、震災に関する授業後に発足した「復興のために自分たちに何ができるか」を考える組織です。FプロのFには、ふるさと、ふっこう、Futureの3つのFがこめられています。

私たちはR S Y主催の「きずな食堂」「子どもサンタがやってくる」「はまのワークショップ」など、

たくさんの活動に参加させていただきました。どのイベントでも参加者の笑顔が溢れ、小さい子供から高齢者の方まで、年齢に関係なく楽しく交流できました。これからもR S Yの活動に積極的に参加していきたいと思っています。また何かありましたら、向洋中をぜひ呼んでください。また、R S Yに頼らない自立した活動もやっていきたいと考えています。



山元町つばめの杜保育所所長 伊藤 ひとみ

山元町は浜通りを中心に甚大な被害を受けました。R S Yの皆様には、震災直後から現在に至るまでご支援いただき厚く御礼申し上げます。

去年は、R S Yを通じて企業様(ユニー、ハーゲンダッツ、花王)よりたくさんの楽器と絵本をご支援いただきました。送迎時に親子のスキンシップが図れるよう、玄関ホールに絵本コーナーを設置しました。さっそく親子で会話しながら絵本を見る微笑ましい姿がみられます。きらきら発表会では、新しいぴかぴか

の楽器で合奏を披露し、保護者の皆さんから大きな拍手をいただきました。つばめの杜保育所は、山元町にもともとあった北保育所と南保育所を統合し、0歳児から5歳児まで164名の子どもたちが元気に過ごしています。子どもたちが整った環境の中で、毎日笑顔で過ごせるように保育を進めていきたいと思っています。温かなたくさんのご支援を頂きました皆様に感謝申し上げますとともに、子どもたちの心身健やかな成長に活かしてまいります。ありがとうございました。



茨城NPOセンター・ commons 横田 能洋

2015年9月の関東東北豪雨の際、鬼怒川の決壊などで常総市は床上浸水が5千世帯を超える大きな災害に遭いました。レスキューのみなさんには避難所の改善、在宅被災者への炊き出しなどで大変お世話になりました。

16年8月に七ヶ浜と常総の子どもの交流キャンプを企画していただきました。子どもたちにとってとて

も貴重な経験になり、スタッフも復興の過程を学べました。きずなハウスの活動からもたくさんのヒントを得、私たちは空家を改装したjuntosハウスを地域の拠り所にしようと、たい焼きハウスを作りました。

今後も地域の人が集える場作りを続けます。そして被災地の方、未災地の方との交流を続けながら復興に取り組んでいきたいと思っています。



災害救援ボランティア 安藤 巖

2017年3月15日、RSY代表理事栗田暢之氏から私たち災害救援ボランティアに対して年の作業に対して感謝状を頂きました。

15年3月から足掛け3年、20数回にわたって、大口町の倉庫で暑い日も、寒い日も「うるうるパック」の作業を行い、東日本大震災、熊本地震、台風10号水害等のそれぞれの地域の被災された方々に対して

生活必需品を始め、小中学生には鉛筆、ノート等の文房具をパック化して段ボールに詰めて送り出しました。その数、合計で26,454個。

これからもご要請にお応えして、少しでも被災された方々のお役に立てればと思い頑張っ「うるうるパック」事業に参加したいと思います。



株式会社ファミリーマート CSR・コンプライアンス部部长 玉川 哲史

震災から6年経った今も復興は道半ばという中で、RSYが被災者の皆さんに寄り添い、私たちとの掛け橋となってきていることを感謝いたします。

昨年9月、ファミリーマートと経営統合しましたが、サークルK・サンクス店舗では、2017年2月ま

で継続して「東北復興支援募金」を実施。これにより全国のお客様の善意をお届けし、「きずな号」や「みんなの家 きずなハウス」の支援を実施してきました。「きずな号」や「きずなハウス」が笑顔であふれ、地域に無くてはならない存在になる。そのような素敵な未来をサポートできることを大変嬉しく思います。



ユニー株式会社 CSR部部长 百瀬 則子

今年の夏休みは七ヶ浜に「みんなの家 きずなハウス」が完成し、夏休みの思い出の場所になりますね。

あの日から7回目の夏が来ます。今年の一年生はまだ生まれていなかったあの夏休みに、RSYのメンバーが何も無い中で、一生懸命子ども達に楽しい思い出を作ろうと頑張っていたね。

今年は「きずなハウス」でみんなが遊んだり、本を読んだり、友達を作ったり、けんかもしたり、たくさん思い出ができるといいね。

「きずなハウス」が、いつか大人になった子ども達の思い出の場所になりますように。

ずーっと、応援していきたいと思います。



ハーゲンダッツジャパン株式会社 営業本部名古屋支店長 小松宏樹

2015年から、愛知県に本社があり、中部を中心に関東・関西エリアでスーパーマーケットを展開されていますユニー・グループホールディングス(株)と共同で「東日本の子供たちに楽器・おもちゃをプレゼントしよう！」企画を東日本大震災復興応援として実施させていただいております。

当企画は、12月1日～12月31日の期間中、アピ

タ・ピアゴの全店舗(2017年4月現在209店舗)にて販売するハーゲンダッツ商品の売上金額の一部(お買い上げ1品につき1円)を積み立て、東日本の子供たちに楽器やおもちゃを贈るものです。ハーゲンダッツジャパンでは、これからも1人でも多くの子供が笑顔になれるように、RSYの皆様を通じて、子供たちへの支援を続けて参ります。



近藤哲雄建築設計事務所 近藤 哲雄

建築家たちによる震災復興支援プロジェクト「みんなの家」として、多くの方々のご協力を受けて七ヶ浜町に新しい「みんなの家 きずなハウス」をつくっています。

現在のきずなハウスはR S Yさんのこれまでの地道な活動により、いつもたくさんの子供たちで賑わい

大人たちも気軽に立ち寄れるみんなの大切な居場所となっています。この活動がもっとひろがって、より多くの人たちのきずながつながっていくような場所になってほしいと思います。

新しいきずなハウスはもうすぐ完成予定です。みんなに末永く親しまれる場所になればと思っています。

R S Y七ヶ浜スタッフから

2016年度の七ヶ浜町は応急仮設住宅の撤去、高台・災害公営住宅への移転、うみの駅オープン、震災後初の海開きなどで景色が大きく変わり、復興に向かって大きく前進しました。

しかしながら、避難生活の長期化や生活環境の変化による不安は大きく、安心して日常生活を営むにはまだまだ時間がかかります。住宅復興がひと段落し、これからは「心の復興」や「移転後のコミュニティ形成」が町の復興の課題と言われています。これまでも交流の場は大切だとさまざまな企画をしてきましたが、今年度は各地区で世代間交流企画「きずな食堂」を実施しました。住民自身が実行委員メンバーとなり、各地区の災害公営住宅自治会や子供会、ボランティア団体と協同しながら役割分担し、実施したことで、「家でネギを作っているから、料理するなら子どもたちのために使ってくれ」「うちで使っていない紙コップがあったから使ってね」など、支え合いの中で他者との繋がりを感じ、生きがいをもつことで、想像以上に生き生きとした姿を見ることができました。そして、震災後ばらばらになった人たちの再会の場、新たな出会いの場にもなりました。

七ヶ浜事務局では常駐スタッフ、町民スタッフの他に、震災当時小学生だった子たちが高校生になり、「きずなハウスで働きたい」と今年度から新たにアルバイトとして関わってくれています。

もう6年、まだ6年。震災から7年目を迎えた七ヶ浜で、この夏には新たな町の資源として、安心して人が集まれる、賑わいの場として「みんなの家 きずなハウス」が完成します。その場所を活用し、住民同士が、地域のために、未来を担う子どもたちのためにできることを共有し、積極的に活動することができるように、私たちも場づくりや生活のサポートを続けていきたいと思っています。今後ともご支援、ご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

郷古 明嬭
 槇島 江梨佳
 鈴木 こず恵
 竹ヶ原 壮志
 最上 真実
 鈴木 あやめ
 渡辺 桃花



認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード
東日本大震災 被災者支援
2016 年度 活動報告書

2017 年 6 月 25 日発行

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード
名古屋事務所

〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階

tel 052-253-7550

fax 052-253-7552

e-mail info@rsy-nagoya.com

web <http://rsy-nagoya.com/>

twitter rescuestockyard

facebook rsy.nagoya

七ヶ浜事務所

〒985-0802 宮城県宮城郡七ヶ浜町吉田浜字野山 5-9
老人福祉センター浜風内